ISSN 1344-5561

京都府立大学図書館報

なからぎ

２３７号

２０２２年４月

多様で豊穣な文化を味わうために

図書館長　小　林　啓　治

もう五年ほど前のことになるが（2017年）、田中勝則『中村とうよう 音楽評論家の時代』という分厚い本が出版された。「中村とうよう」という名前をご存知の方はそれほど多くないだろうが、京都府（峰山町、現京丹後市）出身の著名な音楽評論家である（2011年死去）。1970年代～2000年代にかけて世界の大衆音楽を精力的に、時には舌鋒する説く紹介し、その筋ではカリスマ性をもった人物であった。私も中学生時代から「とうよう」さんが褒めたLP（のちにCD）を買ってよく聴いたものである。そして今でも、「とうよう」さんから学んだ姿勢は維持しているつもりだ。

では、いったい何を学んだか。一番大事なことは、「自分の殻を破る」ということである。味覚もそうかもしれないが、聴覚においてはそれ以上に、成長過程でインプットされた感覚を越え出ることがことのほか難しいのではないかと思う。心地良さを求めて音を聞いている以上、無理して馴染みのないものをこらえて聴く必要はない。クラシック、ジャズ、ロック、ソウル、ポップスなどの好みのジャンルが決まれば、その領域から出て行くことは苦痛以外の何物でもない。「とうよう」さんの評論は、そうした苦痛をあえて体験してみよう、世界を広げてみよう、という意欲をかき立てるものであった。インドネシア、マレーシア、パキスタン、ブルガリア、コンゴ、ナイジェリア、ブラジル、レバノン、マルティニーク……と、多様な地域の大衆音楽を少し古いものも含めて知ることができた。1990年代になってイスラム圏の音楽が入ってくるようになってからは、自分の感覚がいかにメジャーなアメリカ音楽資本によって構成（拘束）されていたかを思い知らされた。イスラム教神秘主義スーフィズムの儀礼音楽カッワーリーを聴いた時は、まったく未経験の豊穣な世界があることに驚愕した。

「とうよう」さんから学んだもう一つの知見は、足下を掘り下げていくと、案外世界はつながっている、ということであった。日本の民謡のコブシに親しみを持っていれば、コブシを通じてアジアの南端を経由してイスラム圏に接続し、果てはモロッコまで一気につながっていけるのである。ストリーミング音楽の時代に突入し、そのチャンスは飛躍的に拡大した。しかし、主体の側が適切な一歩を踏み出さないかぎり、狭い自分の趣味の世界を突破し、とてつもなく多様な世界へとつながっていくことはできない。インターネットは自分の感性に親近性のあるものを抽出してくれるが、意識しなければそこに安住し、知らず知らずのうちに閉じ込もってしまうからである。

これまで述べてきたことは、実は学問の世界にもほぼそのままあてはまる。大学で専門を学ぶのはもちろんであるが、同時にその専門の枠をこえて専門を相対化しつつ幅広く学ぶことが重要である。そうした学びのための、信頼できる道しるべとなるよう、図書館の機能を充実させていきたいと考えている。

「ポピュラー音楽の世紀」
中村とうよう著
岩波書店 , 1999.9
請求記号　764.7 ‖ N

本に出逢うところ

文学部　日本・中国文学科　仁　木　夏　実

2020年春に京都府立大学に着任するまで、高等専門学校（高専）で国語科の教師をしていました。高専は主に機械工学や電気工学、建築学といった理系の勉強をする学校なので、国語はちょっと肩身の狭い教科ではありました。でも授業時間をお昼寝タイムにされては困りますので、いろいろな工夫をしました。その一つに参考図書の回覧があります。授業で取り上げた作品の著者の本や関連する本を順番に回すのです。自分が見終わって次の人に回す時に、その人が居眠りしていたら回せないので、たたき起こしてくれるだろうというのが当初の目的でしたが、予想以上に好評で、授業そっちのけで読みふける学生や、ちゃんと読みたいから貸してほしいという学生もいました。**村上春樹『約束された場所で』**（1998・文藝春秋）、**中野京子『怖い絵』**（2007・朝日出版社）、**郡司芽久『キリン解剖記』**（2019・ナツメ社）などが特に人気だったでしょうか。中でも断トツで学生が夢中になった本が何か分かりますか？

それは毎年夏休み前に出版社が作る、中高生向けのブックレットでした。「ナツの100冊！」みたいなあれです。出版社３社分ほどを紹介して回覧したら、90分の授業３回でやっと１クラス40人全員に回るという状態で、ノートに書名を一生懸命メモしている学生もいる。あんまり食いつきが良いので、「これ、本屋さんでタダでもらえるよ？」と言うと、きょとんとしています。そこに至って、ようやく気がつきました。この子たちは本屋さんにあまり行かないんだ！

考えてみれば、学校の最寄り駅前には本屋さんがありませんでした。数年前に四条通のジュンク堂書店、JR 京都駅の三省堂が姿を消したように、ネット書店の台頭と街の書店の廃業はニュースとしては知っていましたが、それと目の前の学生の日常が結びついていなかったのです。私の高校時代、学校と自宅それぞれの最寄り駅前の本屋さんでの立ち読みはほぼ日課でしたし、友人との待ち合わせも本屋さんが定番でしたが（もし片方が待ち合わせに遅れても退屈しないから）、今の学生の生活に本屋さんはそれほど入り込んでいないのかもしれません。待ち合わせしてるのに会えない時はスマホをチェックしておいた方が良いですしね。そうそう、時間を惜しんでスマホでゲームをしていたら本屋さんが目に入らないということもあるでしょう。

単純に本屋さんに行くことが少なくなったということもありますが、回覧している本を珍しそうに眺めている様子を見ていて、本そのものにあまり触れていない、出逢っていないのではないかなとも思いました。もちろん学校の図書館はありましたが、専門図書が多く、自習室として利用する学生がほとんどでした。スマホやパソコンを触れば欲しい情報はすぐに手に入るけれど、世の中にどんな情報（本）があるのか、自分の興味や必要から少しでもそれたものは目に入りにくい時代なのかもしれません。学生があまりにも本を読まないことに驚いて「これが理系か…」と半ばあきらめの境地でいたのですが、それは薄っぺらい偏見で、面白い本に出逢う機会に

恵まれればちゃんと反応してくれる学生たちだったのです。

そのことに気がついてからは、参考図書を紹介する時に必ず「この本を読みたかったら、どこに行けばよいか」を必ず言い添えるようにしました。この本は学校の / 駅前の図書館で借りられるよ、とか、私が買った本だけど、貸してあげられるよ、等です。授業中手にした時にはピンと来なくても、どこに行けばこうした本に出逢えるのかは知っていてほしい、そして出来ればそれをきっかけに多くの本と出逢ってほしいと思ったのです。

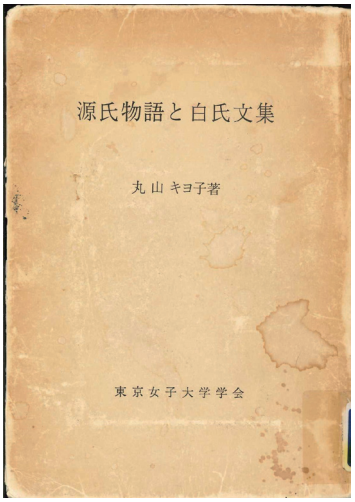
コロナ禍で大学での勉強・研究の仕方は大きく変わりました。私も毎日のようにお世話になっていますが、ジャパンナレッジのようなデータベースを利用することが増え、実際に本を手にすることは以前に比べると少なくなりました。欲しい情報がピンポイントで得られるなど、便利になったと思いますが、やはり実際に本を前にした時、開いた時にしか得られない情報は少なくありません。

たとえば、私の専門分野である日本古典文学では漢和辞典や古語辞典、歴史辞典などが必須ですが、そうした辞典の書籍版にはたいてい年表や地図のような付録が付いています。データベースや電子辞書では見過ごしてしまいがちなそうしたページの豊かさは是非知っていてもらいたい。また、紙の辞書では検索したことばの周囲のことばも目に入るので、類似したことばや表現に自然に気がつくというメリットもあります。

本棚に並んだ本を見ているだけでも分かることはたくさんあります。『源氏物語』の研究書は膨大にあるけれど、日本漢文学の本は少ないな…とか、著作集が出ているということはこの研究者は偉い人なのだな…とか、このシリーズでこの１冊だけ飛び抜けて汚れているのはなんでなんだろう…あ、こんな便利な索引が付いているのか、とか。おお、夏目漱石ともなると全集が何種類もある。しかし書簡まで入れられてしまうのか。文豪も大変だな…とか。

私も先日**丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』**（1964・東京女子大学学会）という本を実見してびっくりしました。これは『源氏物語』における中国文学の影響について論じた先駆的な研究、不朽の名著なのですが、初めて実際に手にしたその本はまるで雑誌のように簡素でコンパクトだったのです。その小さな１冊が後世の研究に与えた影響の大きさと、今から半世紀以上前にこつこつと研究を切り開いたひとりの女性の姿を思い、研究の持つ価値と命脈というものについて改めて考えました。

必要な情報に手軽にアクセス出来ることは言うまでも無く素晴らしいことです。ですが、それはその時探していた本１冊だけを手にしているようなもの。その本の周囲にどんな本があるのか、そのほかにどんな分野の本がどんなボリュームで存在しているのかを知らなければ手にした情報の価値を正しく判断することは難しいでしょう。はじめは圧倒的な情報の前に足がすくむかもしれませんが、せっかく大学に入って大学図書館に好きなだけいられる権利を手に入れたのですから、どんどん分け入って下さい。そしてたくさんの本に出逢って下さい。（この文章で紹介した本はすべて京都府立大学附属図書館に所蔵されています）。



「源氏物語と白氏文集」
丸山キヨ子著
東京女子大学学会 , 1964.8
請求記号　913.36 ‖ M

図書館からのお知らせ

☆図書館オリエンテーション＆館内ツアーを実施します

新入生のみなさんを対象に、図書館オリエンテーション＆館内ツアーを実施します。図書館の設備や利用方法、資料の探し方などを説明した後、実際に館内を歩きながら図書の配置や便利なサービスをご案内します。申込みは不要ですので、お気軽にご参加ください。

○日時　4月 4日（月）11:30 ～／ 13:00 ～／ 14:00 ～／ 16:30 ～　※各回30分ですべて同じ内容です

4月12日（火）12:10 ～
4月14日（木）12:10 ～／ 16:10 ～
4月15日（金）12:10 ～／ 16:10 ～
4月18日（月）12:10 ～
4月20日（水）12:10 ～／ 16:10 ～
※各回20分ですべて同じ内容です（4月4日の短縮版）

○集合場所
京都府立京都学・歴彩館２階　附属図書館「グループ研究室１」にお集まり下さい。

☆春の企画展示　新入生応援「ようこそ府大へ！！」

図書館では、はじめての大学生活、はじめての一人暮らし、大学でのはじめての学習の手助けになるような図書を展示しています。貸出が可能ですので、ぜひご利用ください。

○展示期間　4月1日（金）～ 6月15日（水）
○展示場所　2階　附属図書館　貸出・返却カウンター付近

1年生のための図書館基礎知識～図書館を利用してみよう！～

Ms. 司書：入学おめでとう。いよいよ始まる大学生活、どんな気分かな。
新入生　：はじめまして…というか、実は、昨年７月のオープンキャンパスで図書館を見せてもらって、職員の方からとても親切・丁寧に図書館のことを教えてもらいました。
今日、あらためてこの大学の学生として来ることができて本当にうれしいです。
Ms. 司書：そうなんだぁ。私もなんだか嬉しいなぁ。じゃあ、その時に説明があったと思うけど、大学の図書館は、学生の皆さんや先生方の学習・研究を支援するところだから、これからどんどん利用したらいいと思うよ。
新入生　：はい。いろいろなサービスや支援を受けられると聞きました。相談カウンターもあって、他の大学の図書館や府内の公共図書館が所蔵している図書とか複写したものを取り寄せてくれたりするんですよね。
Ms. 司書：そう、よく知ってるね。大学が所蔵している資料は「OPAC」という端末で簡単に検索できるし、個室やグループ研究で使える部屋もあるから気軽に利用してみて。
新入生　：はい。それからなんか、読みたいけど図書館にない本は買ってもらえるって話も聞いたんですけど…。
Ms. 司書：後援会の方の支援による「学生希望図書制度」のことね。でも漫画はだめだよ（笑）。また図書館に来るときは学生証忘れずにね。

なからぎ　京都府立大学図書館報　237 号 2022 年 4 月発行　編集発行人：小林啓治
発行所：京都府立大学附属図書館　〒606－8522 京都市左京区下鴨半木町　TEL：075（703）5128 ～ 5131
FAX 075（703）5192　ホームページ https://www2.kpu.ac.jp/toshokan/toshokan.html